

# 坪井信道門人による薬名術語集の成立と展開（上）

松田 清

## はじめに

神田外語大学附属図書館洋学文庫収蔵資料のほとんどは京都の古書店主若林正治（1913～1984）の収集にかかるものである。若林が収集に精力を注いだのは、幕末から明治時代における外国語学習にかかわる辞書、文法書、語彙集、教本類であり、写本、刊本を問わず、オランダ語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語関係資料が系統的に収集されている。なかでも文久2年（1862）に『英和对訳袖珍辞書』が洋学所から出版された頃まで、江戸時代に学習の許されたほとんど唯一の西欧外国語学であったオランダ語については、他に得難い貴重な蘭語学資料が豊富である。若林は蘭語学資料の収集にあたって、一般語のみならず専門語も重視する方針を立てていたようで、蘭学生が作成あるいは筆写した医学用語集の写本類が充実している。この洋学文庫の特色のひとつと言ってよい。

これら洋学文庫所蔵の医学用語集のうち成立年が判明している最も早いものは、蘭方医坪井信道の門人たちが編集し、門人の緒方三平こと緒方洪庵と三尾謙造が増補した「薬名アベセ引・コンストウォルド」と題する伊藤圭介の旧蔵にかかる写本と思われる。坪井信道は蘭学塾安懐堂（文政12年1829開塾）および日習堂（天保3年1832開塾）において、オランダ語文法の学習を基礎とするオランダ語医書の講読、いわゆる原典主義による医学教育を日本で初めて導入したことで知られる<sup>(1)</sup>。「薬名アベセ引・コンストウォルド」は坪井信道塾の原典主義から生まれた専門用語集であり、前半の「薬名アベセ」はオランダ語

とラテン語の薬名を「アベセ」順、すなわちアルファベット順に配列し、和漢名の訳語を当てる。後半の「コンストウォルド」(オランダ語 *konstwoord*、術語の意)はアルファベット配列のラテン語日本語対訳薬学用語集である。

この坪井信道門人による薬名術語集は天保5年(1834)に完成し、幕末から明治初期まで、医学生たちの間に写本の形で流布した。この系統を坪井塾本系統と名付けよう。本学の洋学文庫には、この系統の写本が伊藤圭介旧蔵本も含めて6本、認められる。他に、これまでに先学によって報告された6本、また筆者がこれまでに言及あるいは確認したもの4本も、この系統に属する。

坪井塾本系統の写本は流布の過程で新たに大幅に増補改訂され、オランダ語の序文と編者前言をもつ薬名字彙に発展した。編者 M.K. ムネノリ、すなわち松木宗則(弘安、のちの外務卿寺島宗則)が嘉永6年1月6日に前言を書き、杉田成卿が嘉永6年3月5日付けで序文を寄せた「アルファベット引き薬名辞彙」(書名は蘭文書名による引用者訳、京都大学附属図書館所蔵写本)である。松木宗則が坪井塾と並び称せられた伊東玄朴の蘭学塾象先堂で編集したものと思われる。本学の洋学文庫にはこの象先堂本系統に属する写本もある。

安政6年(1859)には大坂の緒方洪庵塾(適塾)で新たに「蘭園日撮」と題する稿本が編集された。編者は安政2年に適塾に入門した村田文夫(枢、文機)である。村田の自筆稿本が京都外国語大学附属図書館に所蔵される。前半は一般語中心の蘭和小辞典であり、後半はラテン語やフランス語からの借用語と病名字彙からなる。洋学文庫はこの適塾本系統に属する写本、さらにこれらの系統に属さない薬名術語集も所蔵する。

本稿は、以上に概観した薬名術語集を系統別に書誌的に考察し、幕末蘭学塾における医学知識の史的展開に関する研究に資することを目的とする。

以下、標目の書名(写本題名)に付した\*印は、写本が無題である場合、あるいはオランダ語の題名をもち日本語の題名を持たない場合に、引用者が与えた書名であることを示す。標目の書名のあとには、本稿で使用する略称を添え、所属する系統を示す記号を、〔T7〕伊藤圭介旧蔵本、のように冠した。この場合、〔T7〕は坪井塾本系統の第7写本であることをしめす。〔 〕内の数字は洋学文庫の整理番号である。

## I 坪井塾本系統の書誌的考察

### 研究史

伊藤圭介旧蔵「薬名アベセ引・コンストウォルド」（以下、伊藤圭介旧蔵本と呼ぶ）は既述のように前半がオランダ語とラテン語の薬名に和漢名を当てた薬名集であり、後半がラテン語日本語対訳薬学用語集である。これと同じ構造をもつ、坪井塾本系統の写本は先学によってすでにいくつか報告されている。いずれも筆写未見であるが、各報告によって特徴をまとめておこう。以下〔T1〕～〔T4〕は緒方富雄<sup>(2)</sup>の報告に基づく（記号は引用者による）。

#### 〔T1〕「緒方本」

緒方富雄所蔵、ただし緒方洪庵自筆ではないという。前半は以下の標題を持つが、後半は標題を欠く。

Verzameling / van de / Kunstwoorden, / betrekkelijk de geneesmid- / delen; / door / M. S. Kenzoo / en daarna verbeterd en / zeer vermeerderd, zelfs / alphabetisch gerang- / schikt / door / O.G. Sanpij. / te Edo / Tenpoo 5.

後半の中見出し「BA」に「balsem vitae hoffmanni 方叢 抜尔撒謨条第三方」、また中見出し「UN」の最後に、「ungentum epispastium[sic] hufelandi 発泡膏ノ一種 方叢芫菁ノ条外用一方」([sic]は引用者の挿入による)とあるように、天保8年ごろ成立した緒方洪庵・青木周弼・伊藤南洋訳「方叢」を引用しているところから、「天保8年以降の手書本であることを示している」。

#### 〔T2〕「菊池本」

「もと菊池（正士）家にあったもので、「菊池文庫」の印がおしてある。東京大学に寄贈せられた呉秀三文書にまぎれこんでいたもの。「楽忘居」の印記があり箕作阮甫旧蔵本。中見出し「EL」部の「elixir stomach」の項に「虔按スルニ」で始まる阮甫の按語がある。前半の標題紙は以下の通り。

Latynsche, Hollandsche / en / Chinesche, Japansche / namen / der / Geneesmiddelen, / door / Leerlingen in tuboi, / en herziend door / W.D. G. Sinzai, enz, / 一 / Te edo, / tenpoo jaar 5.

この内容は「主として宇田川榛斎の『和蘭薬鏡』『遠西医方名物考』『同補

遺』その他から、おもに薬品名のラテン語名、蘭語名をぬき出し、それに榛斎のつけた和名を対照させたものが主体となっている。「名」「薬」「補」などの略符がそれを示している。」

また、後半の標題紙は以下の通り。

Verzameling / van de / Kunstwoorden, / Betrekkelijk de genees., / mid-  
delen; / door / M. O. Kenzoo; / en daarna verbeterd en zeer / vermeer-  
derd, zelfs alphabe., / tisch gerangschikt, / door / O.G. Sanpij. / te edo,  
tenpoo 5.

後半の内容は「医薬にふかい関係のある術語（大部分ラテン語）に訳語をあてたものである。ところどころラテン語のあとにオランダ語の注のついたのがある」、「『未詳』と書いたものや、訳語の記入のない語があちこちにある。」

### 〔T3〕嘉永2年大坂写本

緒方富雄所蔵本。〔T1〕「緒方本」と同じ標題をもつ。ただし、「door / M. S. Kenzoo」の箇所は door M. I. Kenzoo となっている。標題紙の下端に、「schrijven / door / WATA / (S.B.RIOZI) WZA / aan oozaka / kajeij 2」（嘉永2年大坂においてワタ（S.B.リョウジ）写、の意）とある。「方叢」からの引用に加えて伊東玄朴訳「医療正始」からの引用もある。

### 〔T4〕川本幸民関係資料中の写本

片桐一男の報告<sup>(3)</sup>によるもので、羅蘭漢和薬名集の標題に「door de Leerlingen in toeboi, en herziend door W. Zinsai, arts van toejama. te edo, tenpo jaar 5.」（坪井塾生編、津山藩医宇田川榛斎校閲、江戸、天保5年、の意）とあるという。

### 〔T5〕坪井誠太郎本

片桐一男の報告<sup>(4)</sup>によるもので、術語集の標題の編者名は「door M. J. Kenzoo」という。

### 〔T6〕「坪井塾 ラテン・オランダ及び和漢医薬名対照表」

3冊。青木一郎<sup>(5)</sup>がこの書名で引用しているもので、口絵に「天保5年（1834）、坪井信道の塾生が作りあげた医薬品のラテン名、オランダ名、和漢名辞書。」として写真が掲げられている。所蔵先は不明である。

以上6本の坪井塾本系統写本の特徴を踏まえて、以下において、まず、洋学文庫の同系統写本、ついで筆者がこれまでに言及あるいは確認したものを書誌

的に考察しよう。

## 1. 薬名アベセ引・コンストウォールド [T7] 伊藤圭介旧蔵本

### 1-1 書誌

左袋綴じ、写本1冊 [33231]、125+56丁。縦235mm、横160mm。帙入り。表紙に亀甲文の型押しを施す。裏表紙（右綴じの和本と見なした場合は表紙）には左上に題簽が貼られ、「薬名アベセ引/コンストウォールド 合」の墨書が、またケシタには「薬名アベセ引 コンストウォールド」の墨書がある。「アベセ」はABCのオランダ語読み。「コンストウォールド」または「コンストウォールド」は術語を意味するオランダ語 kunstwoord の古形 konstwoord のオランダ語読みである。

裏表紙右下の貼紙に「尾張伊藤氏記」の印記（朱文方印）。帙題簽には、おそらく若林正治の手による「伊藤圭介手写/医学并薬学辞典 全一冊」の墨書と「春和堂蔵」の印記（朱文方印）がある。ただし、本文は伊藤圭介の手写とは認められない。裏表紙の見返しには不正確なオランダ語で「niemand bid want poort toesluiten」（誰も物乞いしない、門が閉められているので、の意）の墨書があり、加減乗除記号と等号がオランダ語の名称、用例とともに、また幾何の問題の抜き書きとその訳が、次のように書き付けられている。

+ optellingsteken, 3 + 4, 三ニ四ヲ加フ  
 - aftrekkingsteken, 4 - 3, 四ヨリ三ヲ減ス  
 × vermenigvuldigingsteken, 3 × 4, 四ヲ乗スル  
 ÷ verdeelingsteken, 3 ÷ 4, 三ヲ四ニワル  
 - 幾分ノ幾句ト云時用ユ,  $\frac{3}{4}$ , 四分ノ三ナリ  
 = gelijkheidsteken a=c; a ∸ c ニ同シ  
 ステインス [未詳]

de middellijn van een cirkel staat tot deszelfs omtrek = 113 : 355  
 輪ノ中径ハソノ周囲ニ比シテ即百十三ト三百五十五ニ比ス

これらの書き入れは伊藤圭介の手ではなく、旧蔵者のものと推定される。最終丁の裏、すなわち、この裏表紙見返しの見開き反対側には、「春齋堂」「若

林」(いずれも朱文方印)の印記の他に、「尾張伊藤圭介之記」「尾張伊藤氏記」「錦窠」と伊藤圭介の印記3種が認められる。「錦窠」は伊藤圭介の号である。表紙の見返しには「itookeiske」の自筆署名(墨書)および「千八百三十年天保元年也」の墨書(伊藤圭介の手とは認めがたい)がある。

本文は毎半葉有界20行の横罫紙を使用。全181丁。2種の語彙集を合冊する。前半125丁は題簽の「薬名アベセ引」に対応するもので、以下の蘭文標題をもつ。

Latynsche, hollandsche / en / chinesche, Japansche / namen / der / geneesmiddelen / verzameld / door / Leerlingen in tuboi, / en herziend door / W.d. G. sinzai, enz, / — / Te edo, / tenpo jaar 5. (「羅蘭・漢和・薬名集 ツボイ塾生編 W.d.G. シンザイ等校閲 江戸 天保五(元)年」の意)

後半の語彙集(58丁)は題簽の「コンストウォルド」に対応するもので、その標題は次の通りである。

Verzameling / van de / kunstwoorden, / Betrekkelyk de genees., / middelen, / door / M. O. kenzoo / en daarna verbeterd en zeer / vermeerderd, zelfs alphabe., / tisch gerangschikt / door / O.G. Sanpy. / te edo, tenpoo 5. (「医薬関係術語集 M. O. ケンゾー編 O.G. サンペイ改訂大増補 アルファベット配列 江戸 天保5年」の意)

前半の標題紙には「尾張伊藤氏記」の他に、「若林」「春和堂蔵」(いずれも方印)および「M.W.・収蔵本・春和堂」(円印)の印記がある。見返しの墨書「天保元年」を勘案して、標題の「tenpo jaar 5.」の筆跡をよく観察すると、最初「tenpo jaar 1.」と書き、のちに数字「1」の字形に加筆して「5」と修正したことが分かる(写真1)。

天保元年(1830)にこのような「薬名アベセ引」(羅蘭漢和薬名集)を塾生が編集した「ツボイ塾」とは、文政12年(1829)に江戸深川上木場三好町に開業した蘭医坪井信道(誠軒、1795~1848)の安懷堂塾にほかならない。校閲者の「W.d. G. シンザイ」とは坪井信道の師であり、支援者であった宇田川榛齋(玄真、1770~1835)を指し、「他」とは榛齋の訳業を補佐した養子の宇田川榕

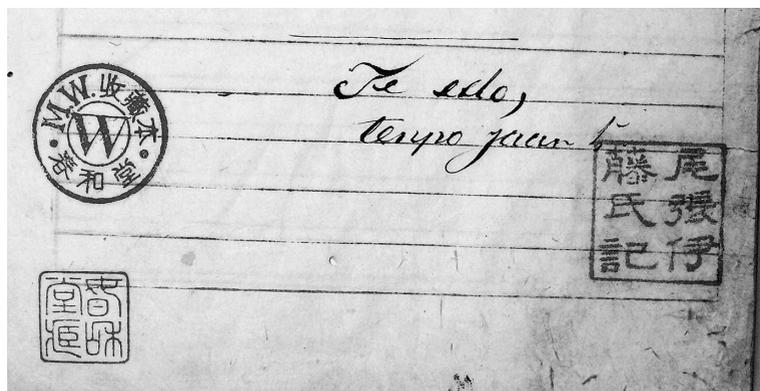


写真1 薬名アベセ引 標題紙（部分）

菴ら、家塾風雲堂関係者の関与をうかがわせる。「5」と修正したのは、天保元年に成立したものの、後半の「コンストウォルド」（医薬関係術語集）の成立年である天保5年に合わせたためと推定される。

後半の「コンストウォルド」のオランダ語標題のうち、「M. O. ケンゾー」は緒方富雄<sup>6)</sup>が同定したように、坪井信道の門人で、備前岡山出身の三尾謙造である。川本幸民筆「雑記 養英軒」（筆者未見）の坪井信道門人書き出しの筆頭に掲げられている人物であるが、詳細は不明である<sup>7)</sup>。緒方富雄は片桐一男<sup>8)</sup>の推定にもとづき、「T2」「菊池本」にある「door M. O. Kenzoo」によって三尾謙造と同定したのだった。「医薬関係術語集」を改訂増補した「O.G. サンペイ」とは天保2年（1831）2月に坪井信道の安懷堂塾に入門した緒方洪庵のことである<sup>9)</sup>。坪井信道は天保3年、深川冬木町に別の蘭学塾日習堂を開塾している。したがって、天保5年成立のこの術語集は安懷堂と日習堂の並立時代に三尾謙造と緒方三平が編集したものであり、安懷堂時代に成立した前半の薬名集とともに、坪井信道塾の原典主義の学風を伝えるものと言える。

## 1-2 前半の内容

前半の「アベセ薬名」の見出し語はオランダ語やラテン語の薬名、計2365語をアルファベット順に配列し、AA./AB./AC.のように各語の語頭2文字を中見出しとして挿入し、検索の便を図っている（写真2）。これはハルマ『蘭仏

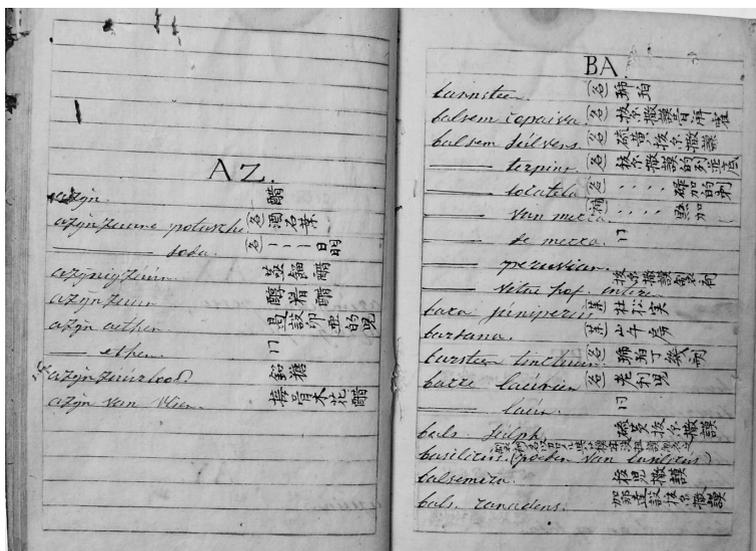


写真2 薬名アベセ引 本文

辞典』の方式にならったものである。ただし、ハルマは語頭3文字を中見出しに採用している。訳語のうち推定で約半分は宇田川榛斎（玄真）訳・宇田川榕菴校の『和蘭薬鏡』初編3巻（1820）、『遠西医方名物考』36巻（1822～25）、『遠西医方名物考補遺』9巻（1834）から採用し、訳語に（薬）（名）（補）いずれかの略号を冠している。具体例をAA./AB./AC.の中見出しから抄出すれば、以下の如くである。（ ）は小字双行注を示す。

AA.

- |                                  |                      |
|----------------------------------|----------------------|
| aardrook.                        | 紫堇                   |
| aalbezien                        | (名) 栗鼈子、蛇莓（覆盆子ノヲ代用ス） |
| aardharssen                      | (名) 比默密耶（石腦油ノ類）      |
| aardveil                         | (名) 連銭艸              |
| aaldbezien gelij                 | (名) 栗鼈子儼列乙           |
| aardappelen                      | 馬鈴薯（エゾイモノシヤカタライモ）    |
| aardwormen (lumbrica terrestris) | 蚯蚓                   |

aardbuijl

AB.

absintium (名) 亜尔鮮

absinth pontic 大葉茵蔯

abrikozen 杏

abrotaum 青蒿

abutilon

AC.

acetas ammoniae liquid (補) 民埕列里精

— morphii 阿芙蓉剂名

— potassae 酒石英

— — liquid 酒石葉液

— sodae — 晶

— plumbi (名) 鉛糖

acetosa (薬) 酸模

acetum aromaticum 酸製剂名

この伊藤圭介旧蔵本は、天保8年以降の成立とされる〔T1〕の「balsem vitae hoffmanni 方叢 拔尔撒谟条第三方」に対応する項目が「balsem vitae hof.interen. 拔尔撒谟製剂」となっており、〔T1〕の「ungentum epispastium hufelandi 発泡膏ノ一種 方叢芫菁ノ条外用一方」に対応する項を欠くところから、〔T1〕よりも古い内容と判断される。さらに他の同系写本と比較する上で有効と思われるこの写本の特徴を挙げよう。

第1に、上例の aardbuijl、abutilon のように訳語欄が空欄の見出し語は、他の中見出しから次の27語を得た。

eufrasin (klaanoog) / ferum vini / frambezien / geele peer / gewoone bessen / gezuiverde salpeter zurige potasch ( de nieuwe benaming voor het salpeter) / gezuiverde zurige wijnsteenig zure potasch (cremor tartari) / gewaschte zwavel (bloem van zwavel) / gezuiverde zwavel (bloem van zwavel) / gezuiverde ammoniak (suspretum [sic: sulphure-

tum] ammoniakae) / gelatina animal diergelijk gelei / herbae capillaris (hairkruid) / indiaansche pijlwortel / jodium / jong peuren [sic: peulem] / kalwijn / maltoe / minisperm / mijrrhe / overkoolzure loogzoutige potasch. zie (zout van alsem) / ovum / ptisane (geest water) / pijp cassia / pijnstellende aftincsel / pijnstellende zout hemberg / tyloos (colchicum autumanale) / uitdroogde zwavelzuur ijzer

第2に、(薬) (名) (補) 以外の典拠を略号や書名などで挙げるものは次の18例である。

anemone pul satil. herb. (叔)	「アネモ子」ノ第八種ヒユルサケル [sic]
datiscae (叔) weedaart	(補) 草名
elaterium	イペイ薬論下38ニ載 驢瓜
elastieke gom	植学啓原ニ出ツ
nitras bismuth	製剤 (涅) ニ出
piper cucuba	明治書入 (ミツト / ス) 畢澄茄
serum lactis alminos	昆斯上卷七十号方
spiesglas houdende zwavelkalk	(culx antimonii cum sulphure) 方出于昆下編七十二号
tabakszalf	(昆) 下卷四十三号方
tinctura antimon aceris	(都) ニ出ツ
tinctura antimon thedenii	(昆) 下卷五百四十五丁ニ出ツ
ungentum nervin.	(涅)
— de linaria	(宝)
— saturenii[sic]	(涅)
— populeum	(涅)
— nitrit.	(涅)
— nervin. offic.	(涅)
zwavel melk	(涅) 効硫芦花ト同シ

ここで、(叔) は宇田川榛齋訳・宇田川榕菴校補『遠西医方名物考』の「引用書目」で「叔墨廬 (シヨメール) 後編」と表記される『シヨメール日用百科

事典』(N. Chomel, J.A. de Chalmot, *Huishoudelijk woordenboek*. Leyden, Leeuwarden, 1768-1777. 7 vols) である。「イペイ薬論」は A.Ypey, *Handboek der materies medica*. Amsterdam, 1811.<sup>(10)</sup>、(涅)は『オランダ薬局方』(*Nederlandsche apotheek*. 's Gravenhage, 1826.) である。saturneni[sic] は原語 saturninum の誤記である。「昆斯」または(昆)はコンスブルック『診療内科提要』G.W.Consbruch, *Geneeskundig handboek voor praktische artsen*. Amsterdam, 1821-1824. 2 vols. の略号である。(都)はトロムスドルフ『合薬実験化学教本』(J.B. Trommsdorff, *Leerboek der artseneimengkundige, proefondervindelijke scheikunde*. Amsterdam, 1815. 2 vols.)<sup>(11)</sup> である。(宝)はファン・ハウテ『薬学提要』(H.J. van Houte, *Handleiding tot de materies medica*. Amsterdam, 1817.) か。(ミット/ス)は未詳である。

第3に、「未詳」とするものは次の16例である。

caric arenar 木名 未詳 / druifekens 未詳 / opuntia (indiuansche[sic] vijge) 未詳 / pulf pueror klein 未詳 / salicis capreae 未詳 / salicis pentandra 未詳 / sal volatil acetar 未詳 / syrup amuls 未詳 / taxis bezien 未詳 / tarta catechu 製剤名 未詳 / tartarus chalyb. marssolubile 同 未詳 / tinctura antimon sapon 未詳 / unguentum zinki 未詳 / varkensbrood 未詳 / vet zeepsop 未詳 / witte hondenklamij 未詳

### 1-3 後半の内容

次に、後半の「コンストウォルド」の内容は主として医薬の処方に使用されるラテン語の用語に訳語を付けたものである。見出し語の総数は1097語である。見出し語はつぎに掲げるC項目冒頭のように、略号はイニシャルのアルファベットを中見出しとして、まとめて掲げ、他の用語は前半の「薬名アベセ引」と同じように語頭の2文字を中見出しとしている(平仮名ルビは引用者)。

#### C

c.c. (conciissa contussa) 剉(きざ)ミ搗ク  
 c.aq. 水ヲ加フ  
 c.aq.c. 常水ヲ加フ

#### CA

calid	熱湯
cataplasma	琶布 (はっぶ)
colore	温
cardiaca	強神劑
calet	煮
calente	煮熟

上例中の「cataplasma 琶布 (はっぶ)」「cardiaca 強神劑」のように、見出し語には薬名も混在している。この場合、訳語「琶布 (はっぶ)」はオランダ語 pap (パップ劑) の音訳である。次例のように訳語のない見出し語のほとんどは、( ) 内にオランダ語の説明を付けている (写真3)。

emmenagoga. (middelen, welke men gebruikt, om de nageboorte af te drijven, baaring te verhaasten, en voornaamelijk om de opgestopte maandstonden te bevorderen.)

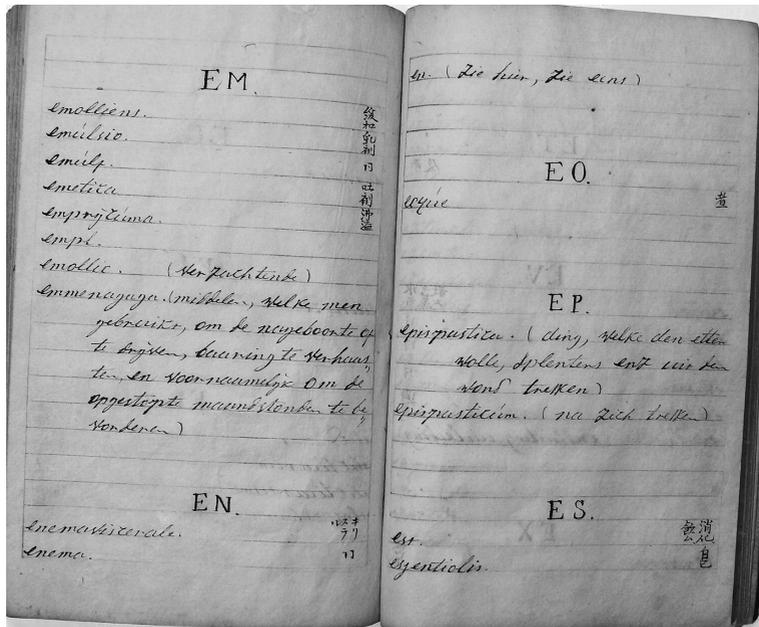


写真3 コンストウォルド 本文

（エンメナゴガ。後産を排出するため、妊娠を促進するため、またとりわけ停止した月経を進行させるために用いられる薬剤。—引用者訳）  
hord. (met garste water gestookt) aq. — hord. 大麦水ヲ加テ蒸餾セル  
—水

lithontriptica. (geneesmiddel, die den steen breeken, en het gegruizelde uit de blaas met de pis uitdrijven.)

（リトントリプティカ。結石をつぶし、その小片を膀胱から尿とともに排出させる医薬。—引用者訳）

mundificantia. (zuiverende mondmiddelen)

（ムンディフィカンティア。腔内洗浄剤。—引用者訳）

nodul. ligat. (in eene doekje gebonden)

（小袋の中に結びつけて。—引用者訳）

これらのオランダ語説明文のうち、emmenagoga、lithontriptica、mundificantiaの3語については、ウォイト『医薬宝函』（J. Woyt, *Schatkamer der geneeskunde en natuurlyke historie*. Amsterdam, 1766）のEMMENAGOGA（月経促進薬、通経薬）、LITHONTRIPITICA（膀胱結石破碎薬）、MUNDIFICANTIA（腔内洗浄剤）3項目のそれぞれ冒頭を利用している。

## 2. 医薬関係術語集・新撰ラテン語バスタールド語集\* 〔T8〕無名氏本

### 2-1 書誌

左袋綴じ、写本1冊 [16165]、54+48丁。縦240mm、横166mm。表紙は無題。蔵書印等、旧蔵者を知る手がかりになるものはない。本文は前半、後半とも同一人物の筆跡で、後半葉有界20行の横罫紙を使用。全102丁<sup>(12)</sup>。

前半は次のオランダ語標題をもち、〔T7〕伊藤圭介旧蔵本の後半に対応する。最初の編者を「m.s. Kenzoo」とするの点は〔T1〕「緒方本」の前半の標題紙と一致する。ただし、オランダ語の綴りがそれほど正確ではない。

Verzameling / van de / Kunstwoorden / betrekkelijk[sic] de geneesmid-  
delen; / door / m. s. Kenzoo / en daar na verbeterd / en zeer vermeer-

derd, / zelfs alhabetische[sic] / gerangschikt, / door / O. g. sanpij / te edo, / tenpoo 5.

後半は次のオランダ語標題をもち、ラテン語や「バスタールド語」(ラテン語やフランス語からの借用語)を見出し語とし、オランダ語の訳語を当てているが、和訳はほとんど書き入れられていない。標題は前半と同じく綴りが正確でなく、Bastaald は Bastaard の誤りである。r と l の混同は蘭学生による幕末のオランダ語筆写本では通例である。

Nieuw Verzaameld / Latijnsche en Bas., / taald[sic] woorden / Boek. / te edo tenpoo Jaar 8. (新撰ラテン語バスタールド語集、江戸、天保8年、の意)

化政期までのオランダ通詞や蘭学者は、しばしば舶載されたメイエル『語彙宝函』(L. Meyer, *Woordenschat.*)を通して、*kunstwoorden* や *bastaardwoorden* の概念を得ていたはずである。スピノザの友人で文学者のメイエル(1629-1681)がアムステルダムで出版した『語彙宝函』(1669)は第1部外来語篇(*Bastaardt-woorden*)、第2部術語篇(*Konstwoorden*)、第3部古語篇(*Verouderderde woorden*)の3部立てになっており、1808年版まで版を重ねた。第1部外来語篇はオランダ語で使用されるラテン語やフランス語からの借用語を見出し語として、オランダ語を当てたものである。ハルマやマーリンの一般語辞典には収録されていない外来語辞典としてオランダ通詞や蘭学者に重宝され、『語彙宝函』1688年版の第1部をもとに、中津藩医大江春塘編・馬場貞由校閲 *Nieuwe-Gedruct Bastaardt Woorden-Boek*, Jedo, 1822. (バスタールド辞書、中津藩主奥平昌高刊)が出版された。

メイエル『語彙宝函』の第2部術語篇は哲学、数学、解剖学、薬学、医学、法学、神学、文学分野のラテン語オランダ語対訳専門用語集であった。宇田川玄随、玄真の門人吉田長淑は1745年版『語彙宝函』の第2部を筆写している<sup>(13)</sup>。しかし、天保期以降には主としてラテン語、フランス語およびラテン語系・フランス語系外来語の学術用語を自然科学も含めて広範囲に収録したウェイラント『学術用語辞典』(P. Weiland, *Kunstwoordenboek.*'s Gravenhage, 1824.) およびその増補版が次々に舶載されるようになった。

羅蘭漢和薬名集(天保元年)、医薬関係ラテン語用語集(天保5年)について、天保8年(1837)に坪井塾門人たちによって編纂された、この「新撰ラテン語バスタード語集」(強調の下線は引用者)は和漢名の訳語を欠くものの、ウェイラント『学術用語辞典』に対応する、より包括的な新しい医学用語辞典をめざしたものといえる。

## 2-2 前半の内容

前半の医薬関係ラテン語用語集を〔T7〕伊藤圭介旧蔵本の後半と比較すると、中見出しによる見出し語の掲出方法は全く一致している。ただし、上述の〔T7〕にある「BE」項目(見出し語は「bene 最モヨク」のみ)を欠き、「EN」項目も1語減り、新たに「MP」「PT」「CY」「GT」「MP」「PT」の中見出しを新設している。〔T7〕後半の内容分析で引用した、上掲のC項目冒頭の用例、およびオランダ語説明文のみの用例はすべて一致している。次の見出し語30語が新たに追加され、見出し語総数は差し引き、1125語に増補されている。

absorbent 制酸 / axungiae (reuzels) / balneum mariae (BM) (waterbad) / cyata (cyathus)(een kelkvool) 二ノニ当ル / d.d.(detur ad) (het wordt gegeven tot) / detur 去除 [sic] / debililans[sic] (verzwakkend) / diapnoica (doorwaseming) / empyreumatica (gebrande) / fict (fictila) (aardwerk) / gtt 滴 / gt 同 / inf. infundatur (trek het) / infctionis[sic] (inspuiting) / lavatoria (wassching) / latio (wassching) / lapis (steen) / MP (massa pellularis) (pille deeg) / ol.p.d.(oleum per diliquum) (afgedroopene olie of gesmotten zout) / pars (een deel) / Pt(pinta) (een pint) (twintig oncen) / quantum satis / quantum libet / rad (radix) (wortel) / sc.(scatula) (doosje) / sequilibra (tt B.) [sic: sesquilibra (lb  $\frac{1}{2}$ )] 一 lb 半 / seba (sebum) (talken) 獣脂ノ硬固セルモノ / sesqui (ander half) 一ツ半 / spitus acidi (zuure geesten) / vapores (uitwaseming)

この増補分のうち、detur(与えよ)の訳語「去除 [sic]」は誤りである。また、infctionis[sic]は injectionis の誤りである。筆写した医学生は標題も含めて不正確な綴りに気付いていないようである。

### 2-3 後半の内容

後半の「新撰ラテン語バスタールド語集」の見出し語は、総計1114語。中見出しを挿入せず、A から V まで、I と J は当時の通例として区別をせずに、各アルファベット項目ごとに、( ) 内に入れて配列し、オランダの訳語を当てているが、項目内の配列は不揃いである。この語集の編集者が原書（未詳）の索引類を筆写するよりは、むしろ原書本文から見出し語をそのオランダ語訳とともに採取したためであろう。この写本の作成者は「(tjipus) tijdorde, vormト一本ニアリ」とあるように、他本と校合している。

見出し語、すなわちラテン語と「バスタールド語」の種類を知るために、試みに A、B、C 各項目の冒頭20項目を掲げよう。ただし、B 項目の見出し語は6語のみである。また、綴りの間違いが多いため、この場合はすべて修正して引用した。見出し語中、無印のものはラテン語またはギリシア語起源のラテン語である。それ以外の「バスタールド語」のうち、ギリシア語には二重線、フランス語には一重線、フランス語からの借用語には波線、英語には破線の下線を付した。\*印を付けた burgerloots（町人小屋、の意）の burger はドイツ語からの借用語である。

#### A

(atonia) atony, onwerkdadigheid / (acuta) hevige / (acute) haastige / (aucta) toeneemende / (action) werkdadigheid / (anus) aars / (antidota) tegenwerkende middel / (amentia) krankzinnigheid / (aphta) sprouw / (antiphlogistica) ontsteeking werende / (acceleratores urinae) pisversnelende spier / (apathie) ongevoeligheid / (apathy) geheele gevoelloosheid / (antidotum) voorbehoedsmiddel / (assaut) lichaamsbeweging / (antony) onwerkdadigheid / (absorption) opneming / (auxiliary) medewerkende middel / (anodijnum)

#### B

(Beredeneerde) verstandige / (burgerloots\*) een soort van loots, ter zijde open, doch door een zeeboezemdok gedekt / (biliosa) galstof / (bounding pulsations) bonzende zaamentrekking / (bouillon) vleeschnat, vleeschsop / (basilia) leverslagader

## C

(cruditas) raauwheid / (crisis) scheiding / (coctio) koking / (chronische) langduurige / (chijmus) spijsbrij / (calliquativa) smeltende, uitmergende / (crusta) ontsteekingskorst, of korst / (colonitis) karteldarm ontsteeking / (colon) karteldarm / (calicicum) warmte stof / (criterion) kenteekenen / (capaciteit) vatbaarheid / (coma) slaapzucht / (convergeren) zamenkomst / (convultie) stuiptrekking / (cachexia) wangedaante / (chrolosis) bleekzucht / (cutaneo-hepatic sympathy) medelijdende overeenstemming tus-schen de huid en lever / (corpus) ligchaam / (chronic) verouderde

見出し語、総計1114語のうち、以下の29語には日本語訳が添えられている。ここでも「バスタード語」には上例にならって、種類を示す下線を付ける。書名には点線を付けた。

(algebra) stelregel 心ノタテ方 (道) / (adstringerende) 水斂 (外科必読) / (amaurosis) 黒翳 (同上) / (conatus ad sedem) 大便ニ迫ノ裏急カ或ハ傾キ乎 / (clysmata) 吉利參的兒 / (chorion) of adervlies van het ei 人身ノ胎子ノ膜 / (conquassantes) scheidende weeën 陣痛第四時即分娩ノ時ヲ云也 / (dolores ad partum) barendweeën 陣痛第三時ヲ云ナリ / (f. continua remittens) 稽留熱乎 之レ愀衝熱也 / (lochia) 悪 / (momenten) oogeblik 時、病ノ発スル時 / (muraena caecilia) blindslang 此レ「リセランド」ノ下卷十三葉ノ註ニ blindaal ノコトニ用ユ スラング」トアール」ハ同シコトニ用ユルヤ、凡テ長虫ノ惣名ナル哉未タ実否ヲ知ラズ / (membrana hyaloidia) 硝石包 外科必読ニ訳アリ / (morbi secundarii) gevolgelijke ziekte 以前一病アリテ後続キ来ル者ヲ云 / (NB. notabe of andere) 附タリ / (opt) 上好 / (objectiefglas) hoornvlies ノコトヲ云コト決セリ objectie ハ tegenwerping / (praesagientes) aankondigende of driegende weeën 初時ヲ云也 / (praeparantes) voortbereedende weeën 同上第二時ヲ云フ / (processus maistoideus) 乳頭起骨 / (polarische) poolsneigende 極ニ傾ク / (q.s. (quantum sufficit) 足ルホドニ / (q.p.(— — placet) 好ムホドニ / (q.v. (— — vis) 飲スルホドニ / (severa) ernstige ケイルキリグ重症ニ多ク用ユ / (sphincter ani) 閉口筋腸窄乎 / (sjankers) 下疳 / (tarsi) 弓状軟骨 (外)

/ (temperament) gesteldheid 多血質、胆液質、粘液質、黒胆液質、以上四質

これらの訳例から、産科を学んだ蘭学生の関与は明白である。三回参照されている「外科必読」は文政5年(1822)に宇田川玄真に入門した箕作阮甫が J.A. Tittmann, *Leerboek der heekunde*. Amsterdam, 1817を訳したもので、未定稿であったが、ここに引用されているところから、天保8年前後には蘭学生の中に流通していたと推定される。membrana hyaloidia は眼の硝子膜のことである。(道)は道訳ハルマ、すなわち蘭和辞典「ゾーフハルマ」であり、「ゾーフハルマ」には確かに編者の商館長ドゥーフが底本のハルマ蘭仏辞典にない見出し語を増補したことを示す D 記号を冠して、「D stelregel 心ノタテ方」とある。algebra はオランダ語で通常 stelkunst であるが、この場合、訳語 stelregel はメイエル『語彙宝函』第1部外来語篇から採られている。

clysmata の訳語「吉利爹的兒」(キリシテル) は単数形 clysmata (浣腸) のオランダ語訳 clyster の音訳である。「リセランド」はリシュラン『新生理学基礎』蘭訳(Anth. Richerand, *Nieuwe grondbeginselen der natuurkunde van den mensch*. Amsterdam, 1821, 1st ed.; 1826, 2nd ed.)を指す。その下巻冒頭の感覚論で、結膜が不透明なため眼がよく見えない動物として例示されている「murena caecilia」(欧州のヒレのないウツボの一種)<sup>(14)</sup>を参照しているので、temperament の訳語に「四質」を挙げるのも「リセランド」下巻の体質論を学んだ結果と思われる。

### 3. 新撰ラテン語バスタールド語集・新撰ラテン語術語集 \* 〔T9〕ヨ・トーゾー本

#### 3-1 書誌

左袋綴じ、写本1冊 [33326]、38+22丁。縦250mm、横168 mm。本文は前半、後半とも同じ每半葉32行の横罫紙が使用され、同じ人物の手になる。表紙に次の蘭文標題が打ち付け書きされ、その下部に「toozoo Jo:」との署名のある(写真4)。この写本の作成者はこのヨ・トーゾーであろう。

Nieuw VerZaa., / meld Latynsch / en Bastaald[sic] W., / oorden / boek.

（新撰ラテン語バスタールド語集、の意）

また、裏表紙は破損した箇所の間際に「Nieuw Ve <....> / Latynsch <....> B <....> / taal <....> / Woorden <....> / Eerste <....> Jo too <....>」と判読出来る同じ手の墨書がある。おそらく表紙と同じように「Nieuw Verzameld / Latynsch en Bas., / taald / Woordenboek」と書かれていたのであろう。

後半の標題紙には、「Latynsche Woordenboek / Nieuw Verzaamerende / Konst Woorden / en / Latynsche Woorden / Boek. / te Edo tenpo Jaar 8」（ラテン語辞典、新撰術語・ラテン語集、江戸、天保8年、の意）と墨書されている。

後半の標題紙の裏にはオランダ語とラテン語の数詞を対置させている。判読しやすいうようにオランダ語をイタリックにして引用すると、「*een una, un / twee dua, duab, duas / drie tria / vier quatuor / vijf quinque / zes sexa / zeven / acht octo / negen / tien decem / vijftien quindecem / half semis*」のごとくである。*zeven* と *negen* はラテン語の数詞を欠く。また、後半の本文末尾の裏にはオランダ語の数詞の序数が漢数字（十一～十九）とともに、「elfde 十一、twaalfde 十二、dertiende 十三、veertiende 十四、vijftiende 十五、zestiende 十六、zeventiende 十七、agttiende 十八、negentiende 十九」のごとく列挙されている。これらの数詞は、後述のように本文がラテン語の処方解読のための用語集であるため、必要な基礎知識として掲げられているのであろう。

後半の最終葉表に、「1839 アクチーンホンドルト子—ゲンエンテルチグ是ヲ呼便二子—ゲギンテルチグト云」とオランダ語の年号の読み方を注記した書き込みがある。

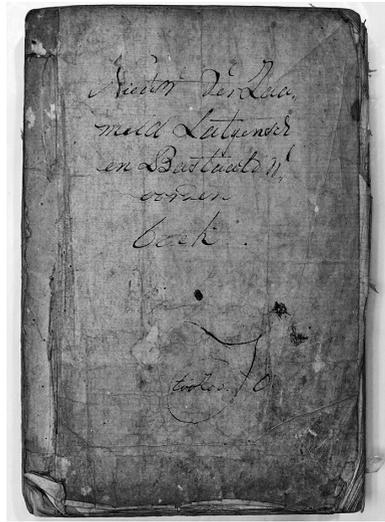


写真4 新撰ラテン語バスタールド語集表紙

以上の特徴から、表紙の標題は前半の標題であること、後半は天保8年に編集されたことが分かり、1839（天保10）年頃、ヨ・トーゾーがこの写本を作成したと推定される。後半の最終葉表には、さらに、おそらくヨ・トーゾーの手で、下記の書き入れがある。

vleesetende voorwerpen 譬へハ鷲、タカノ類、此ハ胃中カ至テ弱シ、  
肉食 食物消化悪ク故ニ腿肉カ強シ、故足力強ク、

gulas[sic]— ——— タトヘハ庭鳥ナトノ類、此ハ胃中カ至テ強ク、  
草食 故ニ食物消化好ク、故ニ大腿肉弱ク

この肉食動物と草食動物の比較論は「リセランド」下巻の栄養摂取論には見当たらず、典拠の蘭書は未詳である。gulas[sic]は英語の grass を誤って書き入れたものらしく、「庭鳥」（鶏）が例に挙げられていることから、オランダ語の原語は plantenetende（草食）ではなく、graanetende（穀食）であったはずである。この書き入れは、おそらくヨ・トーゾーが英語をある程度学習した時期のものであろう。時代的には早くとも、蘭学から英学への転換が始まる文久年間以降であろう。vogelen（鳥類）とあるべきところを誤って voorwerpen（事物、対象）を書き入れているので、ヨ・トーゾーのオランダ語力は高くなく、この語集の編集者とは見なしがたい。この語集の前半の標題が天保8年に編集された〔T8〕無名氏本の後半と一致することは、編集者が坪井信道門人であることを示唆している。

### 3-2 前半の内容

見出し語は総計1045語。アルファベット各項目冒頭の見出し文字は大文字ではなく、小文字を使用する。〔T8〕無名氏本の後半と同じように、中見出しを挿入せず、i と j を区別をせずに、a から v まで、および ij と z の各アルファベット項目ごとに、ラテン語と「バスタールド語」を（ ）内に入れて配列し、ほとんどの見出し語にオランダの訳語を当てている（写真5）。w、x の2項目は立てられていない。ij 項目は「(ijzerkiezen) 鉄ニ硫黄ヲ合シタル者」、z 項目は「(zoologie)」の見出し語（訳語なし）、それぞれ1語のみである。

[T8] 無名氏本の場合と同様、a、b、c 項目の冒頭20項目を掲げ、見出し語の種類を示す下線を付けよう。\*印をつけた arts (医師) はドイツ語からの借用語である。綴りの間違いが多いため、修正して引用する。修正しない場合は [sic] を用いて示した。B 項目は10語のみである。

- a
- (accidentalia) Zie symptomata /  
 (animalisatie) dierlijk maaking /  
 (ad) een voorzetsel van 't beschuldigen geval. wanneer het bij een naam van tijd, of getal word gevoegd, beteekend het tot, tot daar toe. / (arcana) geheime middelen / (accusatig[sic]) aanklaager / (aetiologie) de leer van de oorzaken der ziekten/(anatomia pathologica) ziektekundige ontleedkunde / (arts\*) geneesheer / (analogie) evenredenheid, gelijkvormigheid, overeenkomst, gelijkmatigheid / (antagonistische) tegenwerkende (assertio modia, neutra) de ouden noemden dien toestand / (accidentatie) toevallige / (anastomose) vereeniging of ontmoeting, van den uitersten der aderen en der slagadere / (antagonismus) evenwigt herstellende kracht, tegenwerking / (activa) werkzaam / (assimilatie) gelijkmaaking / (absorbentia) opslorping / (aneurisma) slagaderspat / (abscessus) ettergezwel / (aetiologia) de leer van de oorzaken der ziekten / (anasarca) huid.
- b
- (browniaansche) 人名 / (bislogie) / (biliosa) galstof / (buillon[sic]) vleeschnat, vleessop / (bolus) slikbrok / (balsamica) balsemachtig geneesmid-

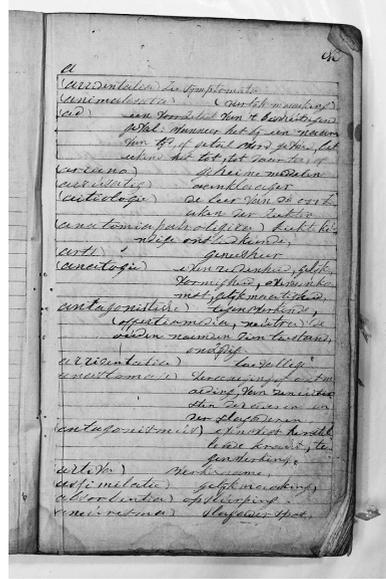


写真5 新撰ラテン語バスタールド語集

delen / (bougies) 蠟撚子 (尿道エ挿ム具ナリ / (brob) / (basis) gronden

c

(continua) is koorts, die eenige dagen duuren, zonder tusschenpozing, of een nieuwen aanval / (communication) gemeenzaamheid, gemeenschap, vriendschap / (chyle) de gijl word in de menschen bewogen als in de beesten. de gijl in 't menschenlichaam, 't maagsap. / (concretio) Zie symphysis / (coalitus) tezamenegroeit, 'tzamengesteld, gevoegd, verknocht / (congestion) vergadering van vochten in 't menschenligchamen, die metter tijd hardigheden veroorzaken / (colliquative) smeltende, vloeibaarmaken / (celeritas) snelheid, gezwindheid, ligtheid, vaerdigheid, rassigheid, schielijkheid, spoedigheid / (cruditeiten) raauwheid, onverteerbaarheid / (crisis) scheiding / (cronische) langduurige / (colliquative) smeltende / (caloricum) warmtestof/(capaciteit) vatbaarheid / (convergeren) zamenkomst / (cachexie) kwaadsappigheid, wangedaante / (corpus) ligchaam / (chemismus) middel / (chemische) scheikundige / (chemise) een hemt of hemde

上例中、accusatig はフランス語の文法用語 accusatif (対格) の誤写と思われる。モーネン『オランダ語文法』(A. Moonen, *Nederduitsche spraekkunst*. Amsterdam, F. Halma, 1706.) はラテン語の accusativus に aenklaeger の訳語を与えており、編者はモーネンを参照した可能性がある。anasarca (全身浮腫) のオランダ語訳 *huid* (皮膚) は不完全である。ラテン語の前置詞 *ad*、名詞 *celeritas* (速さ)、*coalitus* (合生、融合) はそれぞれピティスキス『羅蘭辞典』(S. Pitiscus, *Lexcon latino-belgicum novum*. Amsterdam, F. Halma, 1704.) の次の項目に拠っている。

AD praep. acc. *Een voorzetzel van 't beschuldigend geval. Wanneer het bij een naam van tijd, of getal word gevoegd, beteekend het Tot, Tot daar toe, tot op.*

CĔLĔRĪTĀS, ātis. f. Cic. T.Q. 4.13. *Snelheid, gezwindheid, ligtheid, vaerdigheid, rassigheid, schielijkheid, spoedigheid.*

CŌĀLĪTŪS, ā, ūm. Gell. 12. I. *t'Zamengegroeit, t'zamengesteld, gevoegt,*

*verknogt.*

フランス語 communication (交流、友好)、chyle (乳糜)、congestion (鬱滞) の3語のオランダ語訳はハルマ『仏蘭辞典』(1733)の次の項目に拠っている。analogie はハルマ『仏蘭辞典』の一連の訳語の最後の訳語 *gelijkstaltigheid* のみがこの語集では *gelijkmatigheid* となっている。その理由は未詳である。

COMMUNICATION. *s.f.* Entretien, familiarité. *Gemeenzaamheid, gemeenschap, vriendschap.*

CHYLE. *s.m.* Suc blanc qui se fait des viandes digérées. *De gijl in 's menschen ligchaam, 't maagsap.* Le chyle se meut dans les hommes comme dans les bêtes. *De gijl word in de menschen bewogen als in de beesten.*

CONGESTION. *s.f. Terme de Médecine.* Amas d'humeurs, qui forment des tumeurs & des duretez. *Vergadering van vogten in 's menschen lichaam, die metter tijd hardigheden veroorzaaken.*

ANALOGIE. *s.f.* Rapport, conformité. *Evenredigheid, gelijkvormigheid, overeenkomst, gelijkstaltigheid.*

見出し語は総計1045語であり、そのうちすでに見た2語 (bougies、ijzerkiezen) のほかに、日本語訳が付けられている見出し語を抽出すると、以下の延べ79語となる。綴りの誤写は訂正して引用する。訂正しない場合は [sic] を付した。これらの見出し語はほとんどオランダ語訳を伴わない。品詞の概念のないまま訳語を付け、ラテン語は多く、略語や変化形・活用形のまま採用されている。

(apriori) te voren, van voren 固性 / (atonie) 身体ノ諸器衰弱弛緩ノ発スル弛緩病 / (arthritische) 痛風ノ類 此名甚博シ / (antiphlogisterum) 退焮衝 tegen ontsteeking / (antidyssenteria) 治赤痢 / (amalgamatie), in de scheidkunde, is het maaken van een amalgama, of mengzel van quikzilver met eenig metal, en zulks geschied door het <zelve te> smelten of ten minste gloeyend heet te maaken, en 'er in dien staat een deel quik by te

doen, waar op zy wederzydsch aantrekken en malkanderen ingelyfd worden. 諸金類ノ内黄金ハ尤モ水銀ト和シ易ク、次テ鉛錫及其他金類ニモ合和スレトモ、但シ銅ニハ甚和シ難シ鉄ニハ全ク和セス / (anus) uitersterend[sic] naarsdarm 直腸ノ外部ニ終ノ処ヲ云 / (capsula) 小ナルドウス / (kleine circulatie) 血ノ心臓ヨリ肺ヲ巡ルヲ云 / (grootte circulatie) 血ノ惣身ヲ巡ルヲ云 / (contradindicantia[sic]) ハ水銀ノ梅毒ニ於ケルカ如キヲ「インヂカンス」ト云然ルニ其機ニヨリテハ權シテ他薬ヲ以テ之ヲ治スルコトアリ之ヲ「コントラインヂカンス」ト云フ「コントラハテージェンナリ」 / (crocidismus) 撮空 / (geconcentreed) 内ノ方ヘ進マレタル / (ischuria vesinalis) ware pisopstopping 尿不分泌者 / (ischuria venalis) valsche pisopstopping 難尿分泌也依排泄道之障碍而不得利者 / (idiosyncrasia) bijzondere gesteldheid 各種稟賦 / (meteorismus) 重墜努責 / (opt) 上好 / (optimi) 上好、甚好、最好 / (omnium) 諸皆尽 omnia 亦同 / (olea) 胆八油、油 / (operam) 勞、作業 / (operat) 同上術、手術 / (obducendae) 為衣 / (obduc) 同上 / (octo) 八 / (octiduum) 八日 / (ovilli) 羊 / (ovi) 卵 vitell ovi. 雞子黄 / (odorem) 香氣 / (ontmuren) 溶解スル / (orient) 東方 / (periodice) tijdperk 一時ヲ限リタル / (quant) 量 / (quadrantis) 二 / (quader[sic]) 四分一 / (quae) 故 / (qua) 因 / (q.s.) 適宜 / (quatrm[sic]) 四分 / (quantitate) 幾多 / (quantum) ホドニ / (quam) 同 / (quasi[sic]) 振蕩スル又碎ク / (q.s.) quantum sufficit 足ルホドニ、適宜 / (q.s.) quantum placet 好ムホドニ / (q.v.) quantum vis 欲スルホドニ / (rationeel) 結構ナル redelijk / (semis) ss. 𠄎 半 / (sex) 六 / (temperament) 多血質、胆液質、粘液質、黒胆液質、以上四質 / (tonis) 筋纖維 (神經纖維共ニ云) / (ut fiat emuls) 為乳劑 / (unguent) 塗薬 / (ung) 軟膏 / (usum) 用ユ / (usque) 至 / (ut) 為ニ 故ニ / (uvas, uvarum, passae) 乾葡萄 / (ustio, ust) 鍛 (ね) り / (una) 一 / (virginum) vrijsters 処女 / (vel) 或 / (viscerate) 内臓 / (vulgo) 通用 / (vermifugus) 殺虫 / (cvase, vas, vasis) 器 / (viginti) 二十 / (virens) 新鮮 / (vegetatie) 補益スヘキ、強壯スヘキ / (vinosus) 葡萄酒ヲ加フ / (vinosus) 酒ヲ加フ / (vletscheid[sic]) 尿ナト通シテ復収縮スルコト / (vir) 生 / (vin. rhenum) レインセ酒 / (viridibus) 綠色 / (vino) 葡萄酒 / (vitreo) 硝子 / (vitreum, vitreas) 硝子 / (vertas) 棄ル / (vitelle) 雞子黄 / (valde) 甚タ、至テ /

(vespers) 夕時

上例において、amalgamatie のオランダ語説明文はボイス『新修学芸百科事典』の AMALGAMATIE (アマルガム法) 項目を引用したもので、筆写の際に欠落した語句を〈 〉で補った。金と他金属との親和性を述べた邦文は原文にはない追加である。この語集におけるボイスの参照はこの 1 例のみである。capsula (カプセル) の訳語「小ナルドウス」中の「ドウス」はオランダ語の doos (箱) が外来語として用いられた例である。contradindicantia[sic] は臨床医学用語 contraindicatio (禁忌) の誤りである。indicatio (適応) を「インヂカンス」、禁忌を「コントラインヂカンス」と誤ったのは、オランダ語の indicatie, contraindicatie を誤って発音したためかもしれない。

crocidismus (捜衣模床) の訳語「撮空」、meteorismus (鼓腸) の訳語「重墜努責」は漢方の用語である。idiosyncrasia (特質) の訳語「各種稟賦」、ischuria venalis (排尿不能) の漢訳「尿の分泌せざる者」および ischuria venalis (尿閉) の漢訳「尿の分泌し難きなり、排泄道の障碍によりて利を得ざる者」(読み下しは引用者) とならんで、修業時代に漢方や漢学を学んだ坪井信道の学風を伝えるものと思われる。obducendae の訳語「為衣」は胞衣 (えな) の当て字であろう。

quadrantis は薬量 quadrans (3 オンス) の属格であり「二」の訳語は未詳<sup>(15)</sup>。quader[sic] は quater (四回) または quarter (四分の一) の誤写であろう。quattrm[sic] は quartum (4 分の 1) あるいは quaterni (4 つずつの) の誤写か。quasi[sic] は訳語「振蕩スル」の意味であれば、quassum (quasso 振盪する、のスピヌム) の変化形 quassi の誤写となる。しかし、ここでは quantum sufficit (十分な量)、quantum placet (適量)、などと並んでいるので、quasi (ある程度、幾分) と考えたよいかもしれない。ss. は semis (半分) の省略形である。また  は医師・薬剤師が用いた semis (半分) の記号<sup>(16)</sup> である。ここに列挙される一連の処方用語は、先に成立したこの写本の後半部「新撰ラテン語術語集」と一部重なっている。

上例に見える temperament の「四氣質」は [T8] 無名氏本の後半でも見たように、「リセランド」の下巻を踏まえた結果と推定される。ここでさらに、idiosyncrasia (特質) の語が採用されていることは注目に値する。「リセ

ランド」はその気質論で、人間個々人固有の体質を *idiosyncrasia* と呼んで、論を展開しているからである。もともと、リシュランが伝統的な4体質に新たに神経質を加え、5体質としていることまで理解が及んだかどうかは、この語集からは判断できない。

vletscheid[sic] の本来の語形は不明である。語頭 *vlet-* は *urethro-* の誤写と推定されるが、語末の *scheid* は *sne* (切開) の誤写か分からない。尿道切開を意味するオランダ語はフランス語からの借用語 *urethrotomie* である。*ustio* (炎症) に与えられた訳語「鍛り」の読み「ねり」は引用者が推定したものである。*ustio* の典拠が不明なため、後考に待ちたい。

この前半全体を〔T8〕無名氏本の後半全体と比較すると、標題と見出し語の掲出方法は一致することから、同じ坪井塾本系統に位置づけられるが、内容的にはそれぞれ独自に編集されたもので、両者間に親子関係は認められない。編集者はハルマ『仏蘭辞典』、ピティスクス『羅蘭辞典』を参照するなど、無名氏よりも語学的関心が高い。

### 3-3 後半の内容

見出し語は総数841語。〔T7〕後半の見出し語数1097語、〔T8〕前半の見出し語数1125と比較して、かなり少ない。ほとんどが処方中使用されるラテン語の用語である。巻首書名 *KUNSTWOORDN*[sic] のあとに、語頭のアルファベットに従って A~IJ、L~V の各項目にまとめているが、各項目内の配列はアルファベット順ではなく、不揃いである。各半葉の中央に縦の界線を引き、左右2段に配列している。〔T7〕後半と〔T8〕前半に共通するアルファベット二文字の中見出しは使用していない(写真6)。

ほとんどの見出し語に日本語訳が付けられている。その場合にはオランダ語訳を欠いている。日本語訳を欠くものは次の40語であり、大抵、代数 (*algebra*) で用いる略号 *gel.* (*gelijk* 等しい、の意) のあとに、オランダ語の訳語を付している。これは〔T8〕無名氏本の後半に *algebra* の見出し語があり、〔T7〕伊藤圭介旧蔵本の裏表紙に加減乗除の記号や等号が示されているように、坪井塾門人である編者が西洋数学知識を応用したものと思われる。判別しやすいように、見出し語をイタリック体で示そう。綴りの誤りは訂正し、訂正しない場合は [sic] で示した。

*anti*, gel. tegen / *amphora/bolus*, gel: een mondvul, een beet, een brok, een stuk of klomt. / *butyrum*, gel: boter/*crud*, *crus*, gel: rauw, ongekookt / *cataplasma*, gel: pap/*clysma*, gel: clyster/*caloricum*, gel: warmte stof / *cochleare* / *crepaturam* / *dist*. Zie *aq.* / *e*, gel: van , uit / *Finis*, gel: einde / *fere*, gel: bijna, omtrent / *infusio*, gel: opgieting / *iam*, gel: thans, tegenwoordig / *leviter*, gel: ligtelijk, haastelijk / *loco*, gel: leggen, plaatzen / *laud.opiat.* *lixv--* / *mixta*, gel: mengsel / *mixtis*, gel: boven / *mixa*, Zie *boven* / *magnit*, gel: groote / *magnitudinem*, gel:groote / *natron*, Zie *zoda[sic]* / *p.p.bezeiven[sic]* / *quoad*, dat, als gelijk, om dat, alhoewel, zoo veel als / *qui*, gel: wie, die, wat, welk / *quinque* / *quotidie*, gel: dagelijks, alle daag / *quo*, dat, om dat, werwaarts / *sapor*, smaak / *saporatus*, smaaklijk gemaakt / *si*, wanneer, ofschoon / *similis*, gelijk / *sub* / *tepid-tabellen* / *tum*, gel: dan / *universalis*, gel: algemeen / *unguent*, gel: zalf

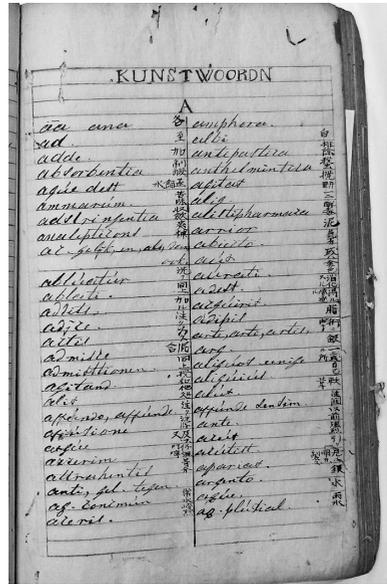


写真6 新撰ラテン語術語集

上例において、*bolus* (一口) に対する一連のオランダ語の訳語は、前半の編集にも使用されたピティスクス『羅蘭辞典』によっている。*dist*. Zie *aq.* に従って A 項目の見出し語 *aque dist* を見ると、「蒸餾水」の訳語がある。しかし、*natron*, Zie *zoda[sic]* の *zoda* は *soda* の誤写であり、*natron* は *natrum* のドイツ語 *Natron* からの借用語であるが、これに従って S 項目をみても、*soda* の見出し語はない。S 項目の見出し語 *laud.opiat.* には *laudanum opiniatum* (アヘンチンキ) の読み、「ラウダニウムヲピアアテン」の書き入れがある。*lixv--* は墨の汚れのため判読不能である。*lixivium* (灰汁) の誤写かもしれない

付表 坪井塾本系術語集写本3種のA・B項目対照表

〔T9〕ヨートン本(後半)	〔T7〕伊藤圭介旧蔵本(後半)	〔T8〕無名氏本(前半)
	[A]	
	a (van elks) 各	a (van elks)
	a (van) aヨリ1ad至52	a (van) aヨリ1ad至52
aa, ana 各	aa	aa 各
	ab ab32 ad 3V ヨリ	ab 自ab32 至 ad 3V ヨリ
	abbut (gewaschen)	abbut (gewaschen)
		abiet
abiecto 斡力	abiecr	
ablutatur 洗フ	ablutim 注ク、洗フ	ablutatur 注ク、洗フ
abluti 同上	abluti 同	abluti 同
absorbentia 制酸	absorbentia 制酸	absorbentia
	absorbens 同	absorbent 制酸
	abstergentia (afhegende geneesmiddel)	abstergentia (afhegende geneesmiddel)
ac, gelijk, en, als, dan, ook	ac (en, als, dan, ook)	ac (en, als, dan, ook)
accерim 仔細、丁寧	accерim 仔細、丁寧	accерim 仔細、丁寧
aceris 峻烈	accерim[sic] 峻烈	
	aceris	
		aceta (azijnen)
	acria	acria
actis 為ス	actis 為ス	actis 為ス
acquiri 得ル、成遂ル	acquiri 得ル、成遂ル	acquiri 得ル、成遂ル
acut 強烈	acut 引ク[sic]	acut 強烈
acutist 引ク	acutist 峻烈[sic]	acutist 引ク
ad 至	ad 至	ad 至
adde 加	adde 加	adde 加
additi 加ル	additi 加	addite 加
adest 消化スル	adest 消化スル	adest 消化スル
	adestrigentia 収斂	adestrigentia 収斂
	adhibetie (toebrengen)	adhibitie (toebrengen)
	adhibeo (geven, gebruiken)	adhibeo (geven, gebruiken)
	adhibenda 用フ	adhibenda 用フ
adipit 脂	adipit	adipit 脂
admisce 混合	admistionen 混合	admistionen 混合
admistionen 同上	admisce 同上	admisce 同
adstringentia 収斂		
adyce 注ク	adyce 注ク	adjice 注ク
	aequal 等ク	aequal 等ク
	aeq. part. 等分	aeq. port. 等分
	aeq. s. 均齊	aeq. s. 均齊
	aere sicco 大氣ニ曝ス	aere sicco 大氣ニ曝ス
affue 及フ、又		
	affunde 注ク	affunda 注ク
affunde sensim 注潤	affundo 同	affundo 同
affundo, affunde 注ク	—— sensemi 注潤	—— sensemi 注潤
affusione 注瀉	affusone 注瀉	affusone 注瀉
agitand 攪和	agitand 攪和	agitand 攪和
agitat 攪動	agitat 同	agitat 同
	agiteuteur 同	agiteuter 同
albi 白	albi 白	albi 白
	alcalind fixa	alcalind fixa
	alexipharmaca (tegengift)	alexipharmaca (tegengift)
	alicholis 極細末	alicholis 極細末
aliq 一二	aliq 一二	aliq 一二
aliquot, eenige 一二成ル所	aliquot 同	aliquot 同
aliquis 自己	aliquis 自己	aliquis 自己
alisticpharmaca 解毒	alisticpharmaca 解毒	alisticpharmaca 解毒
alit 他処	alit 他処	alit 他処
	alterantes plumeren (bloedzuiverende)	alterantes plumari (bloedzuiverende)
alut 軟革	alut 軟革	alut 軟革
	amar 苦	amar 苦
ammarum 苦味	ammarum 苦味	ammarum 苦味
amphora	amphora 酒壺	amphora 酒壺
	ana (van elks) 各	ana (van elks) 各



い。p.p.bezeiven[sic]のbezeivenはbereiden(praeparo、調合する)の誤写である。tepidtabbellenは誤写した原語を同定しがたい。

天保8年に編集されたこの編者不明の〔T9〕後半の術語集と、天保5年に成立した〔T7〕の後半、すなわち三尾謙造編・緒方三平増補「医薬関係術語集」および、同じ編者・増補者による同じ書名を冠しながら、若干増補した内容をもつ〔T8〕無名氏本の前半との内的関連を考察するために、三者のA項目とB項目を翻刻し、対照表を作成した(付表参照)。翻刻にあたっては、蘭学生のオランダ語力を示すために、また困難を極めたラテン語学習の実態を示すために、可能な限り正確に写本の綴りを読み取ることにして、綴りの誤りを訂正しなかった。また、比較を容易にするため、写本の見出し語配列順と中見出しを無視して、できる限りアルファベット順配列に配列し直した。

付表が明らかに示すように、〔T7〕後半と〔T8〕前半の三尾謙造編・緒方三平増補「医薬関係術語集」の2写本はわずかの増補を除けば、綴りも含めて、うり二つである。天保5年成立の〔T7〕後半は内容的には〔T9〕後半の術語集を大幅に増補したものと位置づけられる。しかし、〔T9〕後半の術語集は3年後の天保8年編集と標題に明示されている。この矛盾は、増補前の三尾謙造編「医薬関係術語集」を天保8年に参照して〔T9〕後半の術語集が編集されたと考えれば、氷解する。〔T9〕後半の術語集は、緒方三平(洪庵)が三尾謙造の「あとを受けて修訂し、大幅に増補し、みずからアルファベット順に配列した」(daar na verbeterd / en zeer vermeerderd, / zelfs alhabetische[sic] / gerangschikt, / door / O. g. sanpij)より前の、三尾謙造編集の術語集の姿を伝えているはずである。実際、〔T9〕後半の術語集のアルファベット順配列は、見出し語のイニシャルのみによる配列であり、検索が困難であるのに対し、〔T7〕後半はハルマ辞典の方式にならった中見出しの導入によって大幅に改善され、検索しやすくなっている。

## 4. 薬名并医事秘用集 〔T10〕奥邨裕齋旧蔵本

### 4-1 書誌

左袋綴じ、写本1冊[33291]、82+30丁。縦234mm、横160mm。本文は前半、後半とも同じ每半葉25行の横罫紙が使用され、同一人物の手になる。罫線

は朱色である。表紙中央の題簽に「蘭薬名彙 附医事秘用集 全」、ケシタに「薬名并医事秘用集 全」と墨書されている。標目はこのケシタの書名に拠った。前半、後半とも標題紙を欠き、いきなり本文から始まる。

最終丁裏に「杉浦丘園氏旧蔵書」印が捺され、『和蘭及外国関係図書并物品目録』（杉浦雅楽堂、大正10）[32721]を編集刊行した京都の収集家杉浦三郎兵衛の旧蔵書である。本洋学文庫にはこの印記のある杉浦丘園旧蔵の蘭学資料がかなり含まれており、大抵は杉浦が丁寧に解題を書き入れた薄緑の短冊が挿入されている。この写本の場合、短冊には「此ノ書題名ノ如クアルハベツト順ニ排列シタル蘭和対訳薬物名彙ニシテ末ニ医学上必要ナル名辞ヲ附シ医事秘用集ト名ケタル写本ナルガ序跋凡例無キヲ以テ何人ノ著ナリヤ知り難シ」とある。

前半の薬名集はラテン語、オランダ語の薬名を見出し語とし、AA、AB、AC から ZA、ZE、ZI、ZO、ZU、ZW までの中見出しを用いて排列し、和漢名を当てたもので、この中見出しは〔T7〕伊藤圭介旧蔵本の前半「薬名アベセ引」の中見出しと一致している。内容的には後述のように、「薬名アベセ引」を増補している。前半の末尾には「Einde」（終）の書き入れがある。

後半は本文と付録からなり、本文はラテン語の処方を読解するためのラテン語術語集である。付録は本文に連続する形をとり、付録を独立させてはいない。本文は A、AB、AC から VA、VE、VI、VL、VO、VU までの中見出しを立てるかわりに、各区分の最初の見出し語のイニシアルあるいは最初の2文字を同様の大字で表記している。すなわち、本文の末尾は「VLetscheid / VOlatilis 揮発 / volar 掌 / VUlgo 通用 / XX(vitrum) glas 硝子」で終わる。VLetscheid は誤写と思われるが、原語が分からない。最後の XX は特殊な記号で意味は不明である。薬量 1 スクルペルの等量 XX ゲレンの XX かもしれない。この独特の見出しの立て方と記号 XX を除けば、後半の本文は〔T7〕後半の「コンストウォルド」の中見出しと区分が一致しており、内容的には後述のように、「コンストウォルド」を増補した術語集である。

後半の本文末尾のあとには「G., (gallice) fransch/A., (angelische) engelsche/Ge., (germanisch) hoogduitsch/H.,(hispanisch) spaansche/B., (belgice) nederduitsche」と略号の説明が続く。この略号はそれぞれフランス語、英語、ドイツ語、スペイン語、オランダ語を意味する略号であるが、綴りの間違いが多い。正しくは、「G., (Gallice) Fransch / A., (Anglice) Engelsch / Ge.,

(Germanice) Hoogduitsch / H.,(Hispanice) Spaansch / B., (Belgice) Nederduitsch」でなければならない。

この略号解のあと、さらに丁を改めて、処方（レセプテ）で使用される記号の説明、注意事項と略号・記号類・ローマ数字の表示が続く。説明と注意事項の部分を以下に引用する。ラテン語の綴りは間違いが多いため訂正し、添え書きの訳語は（ ）内に示した。ラテン語の単位は特に誤写がひどく、本来の語形で置き換えた。なお、記号 ʒ（ドラム）は ℥（オンス）の誤りのままとし、改めていない。略号・記号類・ローマ数字の表示部分は**写真7**を見られたい。

(+) 一紙上ニレセプテ数種ヲ記スルトキハ其間ニ置テ區別ノシルシトス  
S レセプテノ終リ唯此一字ノス [sic] ヲ記スルモノハ其用法ヨリ明カナル者カ、或ハ既ニ口ツカラ其用法ヲ授シモノナリ

凡ソ劇劑ノ服量ハ患者及ヒ看侍ニ分タシムベカラス宜ク調劑家ヲシテ各服ニ分テ与シムベシ其服量ノ切実ナランコトヲ欲スルニハ宜ク各服ノ分量ヲ以テレセプテヲ記ス可シ譬ヘハ

opij (阿片), gr  $\frac{1}{4}$  (四分片ノ一) sacchari albi (白砂糖) scrup dimidium (半刃) D. (与ヨ) talis (此ノ) dosis (量ヲ) numero (個) octo (八) ノ如シ 若シ総服量ヲ記シテ各服ニ分タシムルニハ各服ノ量ヲ記セントキハ divide (分テヨ) in (ニ) octo (八ノ) partis (分) aequalis (等ニ) ト記ス 各服ノ量ヲ記セントキハ dispensentur (カケ分ケヨ) of dentur dosis (量ニ) talis (此ノ) octo (八個)

theekopjes (cyathus) wijnkelken (scyphus) 二 ʒ 至二 ʒ 半 / eetlepels (cochlearium) 三 ʒ 至四 ʒ /thelepels (cochlearium parvum) 一 ʒ 至一 ʒ 半 / punt van tafelmes 一刃至二刃 /likeur glaasje ベルキカ三百三十九葉出ヅ<sup>(17)</sup>

付録を詳細に引用したのは、これとほとんど同文の付録を持ち、嘉永7年に適塾生の小林文叔が筆写した処方ラテン語術語集（個人蔵）を2016年11月に確認することができたからである<sup>(18)</sup>。また、安政2年（1855）に緒方洪庵の適塾に入門した村田文夫（枢、文機）が安政6年に編集した蘭和辞典「蘭園日



「薬名アベセ引」と重なる部分について、「薬名アベセ引」の特徴に沿って比較してみると、第1の特徴である訳語欄が空欄の見出し語は、次のごとく「蘭薬名彙」で訳語が加えられているのは7語にすぎない。

aardbuijl / abutilon / eufrasin (klaanoog) / ferum vini / frambezien(rubus idaeus) 栗鼈子 / geele peer 胡蘿蔔 / gewoone bessen / gezuiverde salpeter zurige potasch ( de nieuwe benaming voor het salpeter) / gezuiverde zurige wijnsteenig zure potasch (cremor tartari) / gewaschte zwavel 硫黄華 / <gezuiverde zwavel (bloem van zwavel) >gezuiverde ammoniak (suspretum [sic: sulphuretum] ammoniakae) / gelatina animal (diergelijk geleij) / herbae capillaris (hairkruid) / indiaansche pijlwortel / jodium 沃実謨 / jong peuren [sic: peulen] 豆ノ類 / kalwijn / maltoe / minisperm / mijrrhe 没薬 / overkoolzure loogzoutige potasch. zie (zout van alsem) / ovum 卵 / ptisane (geest water) / pijp cassia 阿勃勒 / pijnstellende aftincsel / pijnstellende zout hemberg / tyloos (colchicum autumnach[sic]) / uitdroogde zwavelzuur ijzer

第2に、「薬名アベセ引」で(薬)(名)(補)以外の典拠を略号や書名などで挙げるものは「蘭薬名彙」では、次のように elaterium で訳語「イペイ薬論下38ニ載 驢瓜」が欠け、unguentum de linaria が(宝)から(涅)に変わっており、sturni[sic]は unguentum saturninum の誤りである。「薬名アベセ引」に比べて綴りの誤写が多く、乱雑な写本である。

anemone pul satil. herb. (叔)	「アネモ子」ノ第八種ヒユルサケル [sic]
datiscae (叔) weedaart	(ホ) 草名
elateruim[sic]	
elastieke gom	植学啓原ニ出ス
nitras bismuth	製剤
serum lactis alminos	昆斯上卷七十五 [sic] 方
spiesglas houdende zwavelkalk (cultantimonii[sic] cum sulphure)	方昆下編七十二丁ニ出ス
tabakszalf	昆下卷四十三号方

tinctura antimon aceris	(都) ニ出ツ
tinctura antimon thedenii	昆下卷五百四十五丁ニ出ス
ungentum nervin.	(涅)
— de linaria	同
— sturni[sic]	(涅)
— populeum	(涅)
— nitrit.	(涅)
— nervin. offic.	(涅)
zwaverzuur[sic] melk	効硫芦花ニ同シ

第3に、「薬名アベセ引」で「未詳」とするものは、「蘭薬名彙」では、次のように実質、すべて未詳のままである。

caric arenar 木ノ名 / druifekens 未詳 / opuntia (indiuansche[sic] vijge) 未詳 / pulf pueror klein 未詳 / salicis capreae 未詳 / salicis pentandra 未詳 / sal volatil acetar 未詳 / syrup amuls 未詳 / taxis bezien 未詳 / tarta catechu 製剤名 未詳 / tartarus chalyb. marssolubile 同 未詳 / tinctura antimon sapon 未詳 / ungentum zinki 未詳 / varkensbrood 未詳 / vet zeepsop 未詳 / witte hondenklamij 未詳

「薬名アベセ引」に増補された見出し語の特徴は、大抵の場合、オランダ語には対応するラテン語を、またラテン語にはオランダ語を（ ）を用いて添え、また、しばしば和漢の訳語を欠くことである。例えば、中見出し AA の部では、aardbezien (fragaris[sic] vesca)、aalbessen (ribis[sic] rubrum) が、また、中見出し AC の部では、acidum aerium (vaste lucht)、acidum sulphuricum dilutum (spiritis vitrioli)、acidum chloricum(chlorzuur) が増補されている。それぞれ、イチゴ、スグリ、窒素、硫酸、塩酸を意味するが、いずれも訳語はなく、fragaris は fragaria、ribis は ribes の誤写である。

〔T1〕「緒方本」の中見出し BA の部の「balsem vitae hoffmanni 方叢 抜尓撒謨条第三方」に対応する項目は、ここでは「薬名アベセ引」の「balsem vitae hof. interen. 抜尓撒謨製剤」と同様に、「balsem vitae hof. interen. パルサム製剤」となっているが、〔T1〕の UN の部の「ungentum

epispastium[sic] hufelandi 発泡膏ノ一種 方叢芫菁ノ条外用一方」に対応する項目は、「薬名アベセ引」に対する増補分の末尾に、「ungentum epispasticum hufelandi 発泡膏ノ一種 方叢芫菁外用第一方」とある。

「蘭薬名彙」の「薬名アベセ引」に対する増補分のラテン語やオランダ語の典拠の有力な候補のひとつとして、この「方叢」すなわち、緒方洪庵、青木周彌、伊藤南洋（岡海蔵）の3人が天保8年（1837）に留学先の長崎で翻訳した『袖珍内外方叢』の原典、プラッヘ『オランダ薬局方による処方書』（1829）<sup>(21)</sup>を考察することができる。その検証は今後の課題としたい。

### 4-3 後半の内容

「医事秘用集」を〔T7〕伊藤圭介旧蔵本の後半「コンストウォルド」と比較すると、見出し語は163語追加され、総計1260語となる。また、中見出しの代わりに用いられている語頭の大文字で示すと、CY、FU、GT、NYO、PT、TH、ULが新たに加えられている。

〔T7〕の「コンストウォルド」に見られず、〔T8〕無名氏本前半の「医薬関係術語集」で新たに加えられた30語について、「医事秘用集」での扱いをみると、以下の通り、AXungiae (reuzels)に「脂」の訳語を加え、deturの訳語「去除」と「ㄋ」を、それぞれ「与フ」「ㄋ」に訂正しているが、大幅な訳語の追加や綴りの修正は行われていない。

absorbent 制酸 / AXungiae (reuzels) 脂 / balneum mariae (BM) (waterbad) / CYata (cyathus)(een kelkvol) 又 theekopie 二ㄋニ当ル / d.d.(detur ad) (het wordt gegeven tot) / detur 与フ / debilitans (verzwakkend) / diapnoica (doorwasseming) / empyreuatica[sic] (gebrande) / fict (fictila) (aardwerk) / GTt 滴 /gt 同上 / inf. infundatur (trek het) giet daarop / intectionis[sic] (inspuiting) / lavatoria (wassching) / latio (wassching) / lapis (steen) / MP (massa pellularis) (pille deeg) / ol.p.d.(oleum per diliquum) (afdroopene[sic] olie of gesmotten zout) / pars (een deel) / PT(pinta) (een pint) twintig onzen 二十ㄋ / quantum satis / quantum libet / rad (radix) (wortel) / sc.(scatula) (doosie) / sequilibra (tb B) [sic: sesquilibra (tb B)] - tb 半 / seba (sebum) (talken) / sesqui (ander half) 一半 / spitus

acida (zuure geesten) / vapores (uitwaseming)

特徴的なものを摘記すると、「B (belgica) nederduitsch / CYata (cyathus) een kelkvol 又 theekopie 二つ二当ル」は付録の単位の説明と関係が深い。「ベルキカ」すなわち、プラッヘ『オランダ薬局方による処方書』と関連があるだろう。

## 註

- (1) 文政12年、信道は師宇田川玄真の支援を受けて、深川上木場三好町に家を借り、診療を開始し、家塾を安懷堂と名づけた。天保3年、信道は深川冬木町に新築移転して家塾を日習堂と呼んだが、三好町の安懷堂も続け、「信道没まで両塾生が従学していた」という。青木一郎『坪井信道の生涯』杏林温故会、1971、86~94ページ。および、青木一郎『坪井信道伝一顕彰碑移転再装記念一』1979（非売品）、6ページ。片桐一男「安懷堂と日習堂」（『日本医史学雑誌』第15巻1号、1969年4月、10ページ）は冬木町への移転を天保7年とし、安懷堂はその年で終わったとしていたが、青木がそれを否定した。なお、仲田一信『埼玉県医学校と日習堂蘭学塾』（浦和市尾間木史蹟保存会、1971、27ページ）は安懷堂の開塾を文政10年（1827）とする。
- (2) 緒方富雄「坪井信堂塾の塾生でつくった2つの医薬辞典」『蘭学資料研究会研究報告』第253号、1971、17~28ページ。
- (3) 片桐一男「安懷堂をめぐる二・三の問題」『日本医史学雑誌』第15巻1号、1969年4月、8ページ。
- (4) 片桐一男「安懷堂をめぐる二・三の問題」、7ページ。
- (5) 青木一郎『わが愛する蘭医の伝記』岐阜県医師会、1981、74ページ。
- (6) 緒方富雄、前掲論文、22ページ。
- (7) 片桐一男、前掲論文「安懷堂と日習堂」において、「安懷堂門人録」として初めて翻刻紹介された。
- (8) 片桐一男「安懷堂をめぐる二・三の問題」、7ページ。
- (9) 緒方洪庵は文政9年、17歳で中環（天游）に付いたときから三平を名のった。緒方富雄『緒方洪庵伝』岩波書店、1984、160ページ、参照。
- (10) 早稲田大学図書館洋学文庫に宇田川家旧蔵本（文庫08\_b0241）がある。

- (11) 早稲田大学図書館洋学文庫に宇田川家旧蔵本（文庫08\_b0237）がある。
- (12) この無名氏本「医薬関係術語集・新撰ラテン語バスタード語集」は『マイクロフィルム版 初期日本蘭仏独露語文献集』（雄松堂フィルム出版、1985）のR9（9）に「（バスタード語彙集）O. G. Sampr te Edo Tempo 5 刊本写し 1冊」（カタログの記載による）として収録されたものである。
- (13) 岡崎桂一郎『吉田長淑先生小伝』、1922、の口絵写真に「吉田長淑先生が三度自ら謄写せられしと云ふ『江戸波留麻』の十巻（八万語）の表紙」と誤って、L. Meijer, *Woordenschat Vervattende de Konstwoorden. De Tiende Druk, Alom veel vermeerderd en verbeterd. Tweede Deel*. Amsterdam, Jeronimus Ratelband, 1745. の標題紙の模写が掲げられている。
- (14) 蘭訳の第2版の代わりに以下を参照した。Le Chevalier Richerand, *Nouveaux éléments de physiologie*. 9 me éd. tome II, Paris, Béchét Jeune, 1825. p. 13, note (1).
- (15) J. Woyt, *Schatkamer der geneeskunde en natuurlyke historie*. Amsterdam, 1766. のQuadrans項目に「Quartariumともいう。医家や薬局において、3オンスまたはローマ・ポンドの四分の一を意味する」と説明がある。
- (16) J. Woytの前掲書巻末「医学・化学・薬種商において用いられる記号の意味と説明」(Beduiding en Verklaring aller Characteren dewelke in de Medicyn, Chymie en Materiaal-kamer gebruikt worden) のTabula IVに「Semis de Helft」の記号として掲げられている。
- (17) 「ベルキカ」はプラッヘ『オランダ薬局方による処方書』(M. W. Plagge, *Receptboek volgens de Pharmacopoea Belgica. Een zakboekje tot dagelijksch gebruik voor geneesheeren en heelmeesteren*. Rotterdam, Wed. J. Allart, 1829. を指す。同書 p. 339 に、3-maal daags een likeurglaasje vol te nemen (リキュールグラス1杯分を日に3回服用すること) とある。この処方書は緒方洪庵・青木周弼・伊藤南洋（岡海蔵）訳『袖珍内外方叢』の原書である。宮下三郎『和蘭医書の研究と書誌』井上書店、1997、21ページ、参照。
- (18) この写本の標題紙には「VERZAMLING VAN DE KUNSTWOORDEN betreffende de geneesmiddelen, door M.I. KENZOO, En daarna verbeterd en zeer vermeerderd, zelfs alfabetisch gerangschikt, door O.G. SANPY. Te edo, tenpoo 5 Geschreven door K.H. BOENSIK aan oorzaak kajeij 7」(「医薬関係術語集 M. O. ケンゾー編 O. G. サンペイ改訂大増補 アルファベット配列 江戸 天保5年 嘉永

7年大坂にてK.H. プンシク写」の意」との蘭文タイトルと「小林蔵書」の印記がある。また見返しに「精々斎蔵書」との墨書がある。「K. H. プンシク」は「嘉永五年壬子初夏」に適塾に入門した「加州小松小林堅揚三男文叔」に他ならない。「適々斎塾姓名録」、緒方富雄『緒方洪庵伝』岩波書店、1984、228ページ、参照。この写本の書誌と内容分析は本稿（下）に譲る。

- (19) 村田文夫編「蘭園日撮」については、拙稿「単語帳からみた大坂の蘭学」、『大坂が見た「異国」－オランダからの風』大阪府立中之島図書館、1997年10月、p.20において簡単に紹介したが、本稿（下）において、より詳しく考察する。
- (20) 「適々斎塾姓名録」、緒方富雄、前掲書、271ページ、参照。
- (21) 注16および、緒方富雄、前掲書、36ページ、参照。